

# 妙たえ の光ひかり

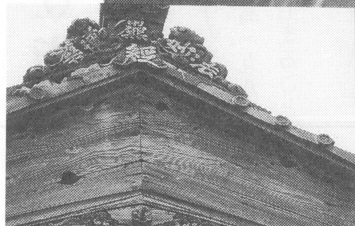
通刊41号 復刊19号

1996年12月5日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡  
巻町角田浜 〒953  
TEL 0256-77-2025



▲ガラス越しに外を眺める



◀本堂入り口に空けた穴

## アオゲラ

本堂や山門の古くなった軒下の板、土蔵の下見板に直径十センチ程の穴が幾つも空いている。同じ様な穴が境内の松の木にもあって、これがムササビの住みかとなっている。

穴をあけたのは「アオゲラ」というキツツキ科の鳥。穴あけ作業中はドドドドドと、反響するせいもありかなり大きな音がして、道路の掘り返し工事かと思う程。カメラを持って近づくと、ケケケケと鳴きながら山の方に飛び去るため、証拠写真がなかなか撮れない。

図鑑によれば、一年中日本に住み、標高三百から千五百メートルの山地の落葉広葉樹や針葉樹の多い場所を中心に生活する。スズメの四倍ぐらいの大きさで、名のとおり全体が緑色だが、おすは頭の上が広く赤色になっている。森の中に住み単独でいることが多い、とある。

この写真は秋のある日、客殿の玄関から入りガラス戸にぶつかって外に出れなくなったのを撮影したもの。燕なら玄関から入って、玄関から出て行けるのだが…。

# 七面山登詣の怪

小川英爾

日蓮宗の総本山、身延山久遠寺の裏手にある七面山は、日蓮宗の守護神『七面大明神』をお祀りする山として、毎日たくさんの方が登る。標高一九八二メートル、徒歩で四〜六時間かかる山上に敬慎院というお寺がある。ここに参籠（お参りのため寺に泊まること）して、翌朝目の前の富士山から登るご来光を拝むと、さらに感動が深まる。

この七面大明神発祥の地が妙光寺だとする説が古くからあり、身延山に団体参拝すれば必ず登詣（登山して参詣すること）している。この度も参加者の半数が、若い鎌田の先導で山路に挑んだ。足腰に自信のない他の半数の参加者は、住職が付き添って久遠寺周辺の寺院をバスで参拝、七面山登山口近くの旅館に宿泊する。

その朝、朝食をすませて七面山登詣組がバスで身延山の宿坊を出発してまもなく、これに同行した旅行社添乗員から、残った主任添乗員に入った人数確認の電話で事件は始まった。全参加者百一人のところ、残った組が四十九人なのに、七面山組からは五十三人との報告で一人多い。七面山組は四十二人のはずだから早く確認をと、携帯電話で連絡する。しかしその後の返事も、二台のバスに分乗した人数をバスガイドと供に三回数えた。途中から登山口までワゴンタクシーに乗り換えたが、そのときの合計人数も、またその際に別途で集めたタクシー代金も、四十三人分あったから間違いない、という。そういえば朝になって登るのをやめた人が出て、用意した一個多いはずの昼食のおにぎりが残らなかつた。

全員が無事に山上の敬慎院到着。夜の報告でも、到着時に参籠代金四十三人分支払いし、夕食のお膳も残らなかつたとのこと。電話で双方の名簿を照合したところ、七面山組の名簿で変更した人を消さず、四十二人が正しいと判明、点呼で人数確認をすることにした。しかし大半が就寝してしまい、点呼がとれないので頭数を数えた

がやはり四十三人いるとの返事。さあ大変、とにかく明日の朝食時に再確認の上、他の人が混入していたら責任を持って下山させるよう指示、主任添乗員と原因を話し合った。

考えられるのは、新潟を出発した時点から名簿より一人多かった。七面山組が身延山を出発するところで、故意か間違いかで他人が一人紛れ込んだ。この二点だが、いずれも可能性は低い。一応念の為前夜の宿坊に電話して、他の団体で行方不明者がいないか問い合せたがなかった。残る可能性は、足のない人がまぎれこんだか。ここまで考えて背筋がひやりとするのを感じ、明朝の結果待ちとした。その頃、七面山ではまだ添乗員と引率の鎌田が、頭数を数えて首をかしげていた。

翌日、登詣しない組は登山口の門で、下山して来る人達を出迎えた。その中に小さな遺骨の包みをした石田一作さんの姿があった。石田さんは数年前に妻の美千江さんとこの旅行に初めて参加、二人で七面山にも登詣した。そのとき美千江さんは初めての七面山に大感激、以来もう一度登詣する日を楽しみに農作業に励んできたところが突然の脳溢血におそわれた。緊急手術の効も無く無言の帰宅となり、家族の驚きと悲しみは大きかった。享年六十九歳。この春三回忌を済ませ、夫の手の中のこの度の身延山参拝だった。

美千江さんは一作さんと農業を営んで、二男二女を独立させた働き者。信仰も厚く、妙光寺の年中行事には台所係の中心として、また角田浜講中（檀家の集まり）の世話係として、なくてはならない人だった。優しく機転のきく性格は、近所の人達にも信頼され慕われた。子供達も母親を慕い、今回の身延山旅行に皆で相談して二女の内山信子さん（四四）が参加、母の念願だった七面山に登詣した。今回、一作さんは足に自信がなくて登詣せず、身延山での特別法要に出席、仏前に美千江さんの遺骨を安置して供養した。この時以外に、遺骨が一作さんの手許を離れることは片時もなかった。

信子さんが七面山から下山、出迎えた一作さんの手にある母の遺骨を見つけて駆け寄り、これにとりすがって泣いた。このとき一作さんも農作業できたえた大がらな体、日焼けした顔に大粒の涙を流した。

全員が下山しての報告では、「敬慎院での朝食のときお膳が一つ余り、人数も四十二人でした。不思議としか言いようがありません」と。このとき、美千江さんが一緒に登詣したんだと、自然に感じられた。

## 信心



### 「渴の爺ちゃん」逝く

故 内藤 八十一さん（87才）

「渴の爺ちゃん」と、檀家や地域の人達に親しまれていた巻町の内藤八十一さんが、十月二十二日に亡くなられた。親子のようにつきあう本間さんに、「一緒に温泉に行こう」とめずらしく

声を掛け、出かけた先で入浴中にスーと息を引きとった。一年半看病をした故妻リイさんの一周忌を春に済ませ、元気にしていられたので、皆が驚いた。十月五日の妙光寺先代住職の法事に出席して、「弱ったから世話人を引退したい」と言って帰られた。中旬、息子夫婦が身延山旅行で留守の間、天気が晴れると自転車でリイさんの妹宅、友人宅と訪ね歩いた。そして温泉に出かける前日、嫁いだ娘を訪ねて「明日温泉に行ってくる。早く婆さんが迎え

に来ないかな」と言い残して帰った。「自分から温泉に行こうなんて言う人ではないのに……」娘は気になった。

いまでこそ米どころとなったが、信濃川水系の氾濫で長年水害に苦しめられた蒲原平野。内藤さんはこの調水池だった澗の排水機番人をしてながら、僅かな水田を耕作して生計を立ててきた。その生真面目な性格をみこまれ、妙光寺の先々代住職の世話でリイさんと結婚、二人で苦勞しながら農業規模を拡大してきた。

温厚、誠実、常に人の身を案じ、酒を好まず、行動も果敢という文字通りの人柄で、信頼を寄せる人が多く、農協理事、土地改良区総代を長年勤めたことに昭和三十三、三十六年と記録的

大水害にみまわれた際、農家の先頭に立って澗の干拓工事を国に陳情して、四十三年見事に完成させた。農業不振の昨今だが、ここには農業関連の学校が四校建つなど、県内の農業教育の中心地となっている。そこに通う教師、学生たちからも慕われる夫婦だった。

妙光寺では世話人として、四十年以上にわたり住職、檀家総代の補佐役に徹してきた。役員会での発言は常に目おかれ、また境内の掃除、修復作業にも黙々と体を動かしていた。妻のリイさんが、五十年間台所係を勤めてきたことはご存じのとおり。檀家のみならず、出入りする他のご住職も「渴の爺ちゃん」「渴の婆ちゃん」と、信頼と親しみを込めて呼んできた。

知らせを聞き、世話を受けたたくさんの人達が驚いて葬儀に駆けつけた。中のひとり「人のために生きてきた爺ちゃんらしく、最後まで人に面倒をかけないで逝った」と、寂しそうに言った。

# 身延山参拝の旅報告他

## 夏台風の被害

お盆の八月十四日に台風が巻町を通過、他宗のお寺が本堂の屋根を片側全部めくられる被害がありました。

妙光寺では本堂のトタン屋根の一部と、茶室の屋根の杉皮が全部めくられました。本堂の屋根は昭和三十八年に、それまでの茅葺きをはずしてカラートタンに替え、以来ペンキ塗装を繰り返してきたものです。既に三十年以上経過して全体に錆びて限界がきており、今回は応急処置に留めました。業者の話では全面張り替えが必要で、千二百万円はかかること。

茶室は昭和二十九年、総理大臣就任前の石橋堪山が、講演にいられた際新築したもの。五十六年の客殿新築のと

き雨漏りがひどく、最も安価で見栄えのする方法として杉皮葺きにしたものです。今回も杉皮葺きにし、檀家で新潟市の庭師遠藤均さんが材料費のみで、工事を奉納してくださいました。

## お会式、先代法要

十月五日に日蓮聖人七百十五回忌と、先代住職浄妙院日陽上人二十三回忌の法要を営みました。八十余名の檀信徒の出席をいただき、晴天に恵まれた穏やかな秋の一日、しめやかな法要を営むことができました。

## 身延山、七面山、鎌倉団体参拝の旅

日蓮宗総本山身延山久遠寺への参

拝旅行を、四十名の予定で募集しましたところ、百名を越す申し込みにいただき、バス三台の大団体となりました。檀家、安穩会員が夫々の親族、友人を誘い県外からも参加いただきました。



龍口寺での参拝 (小林清さん撮影)



## 七面山での富士山からの御来光

(小林清さん撮影)

十月十四日早朝、新潟、曾根、巻の三地区からバスが発車、合流して長野經由で山梨県の身延山へ。一時半、途中から降りだした激しい雨のなか久遠寺に到着。法話を聴聞して、本堂でのご開帳法要。その後広大なお堂全体を拝観。さらに妙光寺先代住職と現法主貌下が親友だったご縁から、貌下の応接間等のある水鳴樓を特別に見学させていただく。夕刻宿坊の北之坊へ。雨が止まず明日の天気が気がかり。

十五日六時、久遠寺本堂で朝の法要。辺りを覆っていた霧がどんどん上がっていき、青空も見えだす。朝食後、七面山に登る半数はおにぎりを持ってバスに乗車、途中の角瀬でワゴンタクシーに乗り換えて登山口へ。ここから二千メートル弱の山上の敬慎院まで徒歩で四〜六時間、夕方全員到着。夕食後に法要があり、荘厳さと冷え込みで身が引き締まる。早々に名物の長蒲団で就寝。

残った組は午前中久遠寺で特別法

要、ロープウェイで奥の院参拝、バス移動して昌福寺参拝。午後昇仙峡を観光して角瀬の旅館泊。

十六日、七面山では暗いうちに起床、外に出て真東の富士山から昇る朝日を待つ。富士山の裾野から雲が湧き、遅めのご来光を拝して感動。朝食後下山を開始し、早い人は九時半に登山口帰着。登らない組が登山口周辺で、「お万の方様の滝」や途中の坊を参拝して出迎えた。十二時半、全員が合流して富士五湖經由で箱根温泉へ。疲れを流した後、小湧園ホテルの百名の宴席は盛会だった。

十七日、鎌倉に出て龍口寺、光則寺参拝、市内観光して新潟へ。夜八時過ぎに夫々帰宅となった。

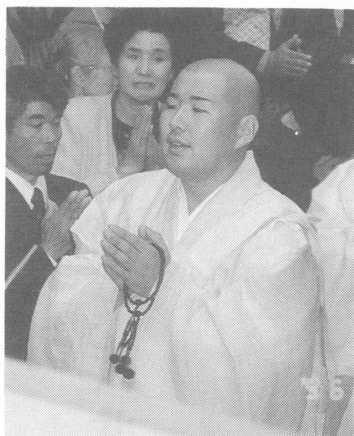
四日間のうち雨の日はあっても参拝に全く支障なく、ご来光も拝めました。百名を越す団体ながら事故もなく、皆さん本当に喜んで下さり、仏天の加護と感謝しています。身延山参詣は一年おきです。来年は十一月に、九州の日

蓮宗寺院参拝の旅を考えています。

### 鎌田、百日間の修行へ

妙光寺で修行研修中の鎌田が、百日間の修行に入りました。千葉県市川市中山の遠寿院大修行堂で、十一月一日から二月十日の期間です。この間は一日の睡眠が四時間、あとは読経、写教、水行、そして修法（加持祈祷）の研修。食事は原則として白粥。むろん外出、休日なし、の生活です。

修行の歴史は古く、この遠寿院で始まりました。その後同じ中山で、遠寿



院の本寺の法華経寺と、身延山久遠寺でも行なわれてきました。しかし近年、

宗門の政策的な都合で法華経寺に一本化、ここだけが公認の修行堂とされました。その後も遠寿院では非公認ながら、修行堂の歴史を続けています。

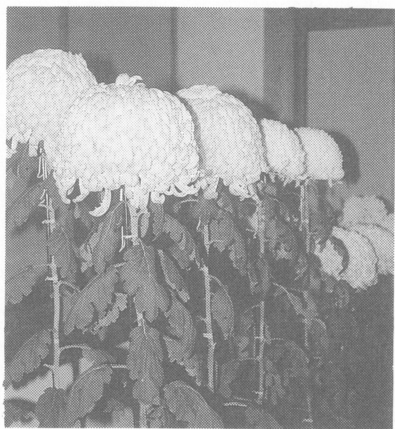
三方所がまとめられたことで、法華経寺に毎年二百名近い大勢の修行僧が集まります。そのため限定された施設で、公認とは言え修行に支障があると指摘もできています。

鎌田の場合は、資格を得ることより自身の修行を主目的に、あえて遠寿院を選びました。また、妙光寺と遠寿院の住職が古くからの友人でもあり、信頼しておまかせできるという事情もあります。なにしろ遠寿院の今年の修行僧が総勢八名、目の行き届いた厳しい修行になることと思われま

す。帰山式（修行を終えて寺に戻り、仏前に報告する式）につきましても未定ですので、その折にご案内します。

### 菊の花が玄関に

十一月、昨年に続き巻町の内藤清さんが、丹精込めた菊の花を飾って下さいました。見事な大輪の咲いた五鉢と、盆栽仕立てが一個。身延山の山内寺院二十一カ寺の婦人研修会ははじめ、多くの参拝者に喜ばれました。



## 闇に消えたムササビの行方を追う③

新潟西高校教諭 藤田 久

小正月にしては珍しい小春日和に  
つられ、午後の明るい時間帯に調査に訪  
れた。墓地の方にいると、境内から  
「ムササビが来てるよ！」という突然  
の呼び出しがある。

夕闇には一時間もまだ早いのにと思  
いつつ、かけつけると、ねぐらのマツの頂  
きにムササビが一頭うろついていた。見  
た瞬間、「発情行動だ」と気づいた。こ  
れはチャンスだとカメラを取りに車へ戻  
る。突然、一頭が巣穴から出て滑空する  
のが見えた。これはカメラどころではな  
い。そのとき二頭目が追って滑空し、小  
屋裏のマツに向かった。こんどは樹上に  
いた先の一頭目が滑空し、ヤギ小屋奥の  
マツ林に向かっていた。と同時に樹上に

出た二頭目が再び後を追う。

あっといふ間の出来事である。一頭  
に集中すれば他を見失う。記録をする  
間もなくパニック状態だ。我に返ると  
回り道をして神社の入口に走って行  
き、海岸マツ林前の道路に出る。する  
と林内の方で滑空が立て続けに起こ  
り、キュルルとはげしく鳴き声が響  
きわたった。しばらくして一頭が神社  
側の林に戻ってくるのが確認され、騒  
ぎは静まった。珍しく足元がまだ見え  
る薄明るい時間帯の出来事で懐中電灯  
が必要ではなかった。

### ムササビの恋

冬の発情は12月末に起こるのをかっ

て経験したことがあるので、定期的に  
終わっていたものとはかり思っ、こ  
ちらも油断したので久々に興奮してし  
まった。

明るいうちに巣穴へきたのが、もち  
ろん日没まで待ちきれないオスで、先  
に滑空した方はメスであろう。発情し  
たオスはメスを追い続ける。長い尾を  
パタパタと振ってメスに近づき求愛す  
るが、このときのオスが結婚に成功し  
たか、振られたかまでは定かでない。  
追われたメスが枝の先に移ってくるり  
と向きを変えて向き合う姿勢になった  
ときは、オスは拒否された格好になる。  
またライバルのオスがいればオスどう  
しの争いも起こり、騒ぎはもつと大き  
くなったであろう。

ムササビの夫婦関係はその場限りに  
終わるので子育てはもっぱら母親が単  
独で行ない、いわゆる母子家庭である  
したがって二個体が仲良く並んでいれ  
ば、ふつう親子と思っつよい。ただ、  
たまに双子が二頭生まれることもある



ので兄弟の場合もある。

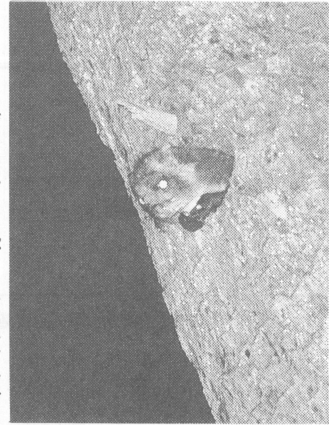
## ムササビの子育て

冬のこの時期に妊娠すると出産期は4月末から5月初め頃と推定される。連休の頃に誤って巢の入口から落ちたとみられる幼獣が拾われてきたことがある。まだ目が開いて間もなかったことから妊娠期間は4ヶ月程度だろう。

母親は巢穴から出ていっても時折、授乳に戻ってくる。ライトに白いお腹の毛皮にピンクの乳首が観察されるのもこの頃だ。春誕生の幼獣はときどき母親と同居しながらも単独で営巣するようになる。だから個体数が増え、鳴声がにぎやかになるのも6月前後である。幼獣は尾の細さで成獣と識別されるが、滑空距離が短かったりで危なっかしく、やはり初めのうちはうまい滑空とはいえないようだ。

## 年二回の発情説

実は、恋の季節は冬だけではない。



巢あなから見下ろすムササビ

6月にも観察される。それは先に述べた「二個体の同居」が秋の10月から11月にかけて起こることからである。妊娠期間の四ヶ月を差引いても割り出される。この事実は、かつて松代高校生物部の研究から浮かび上がってきた成果でもある。

夏がすぎるとムササビはそれまでの巢穴から不在になり、晩秋にふと戻ってきて二個体がしばらく姿を見せる。だから観察の継続がなされないことは当時の悩みの種だった。しかし不在が毎年の出来事であることに気づいたの

は、巢穴滞在に関する五年間の記録を重ねたところからである。ちょうど季節的にも稲干しの時期に当たり、巢穴の木が「はさ木」に使われていて、これがムササビの不在になる原因だろうと考えていた。つまり実際は出産期になるとメスが育児に適した不在の巢穴へ戻るようなのである。

はたして年二回の繁殖期が存在するかどうか、当時は仮説としていろいろ話題になったが、ネズミにも春秋に繁殖期があるように、年二回あってもかまわないのではないかと考えていた。それにムササビは一度に子をたくさん生むのには適さない。なぜかと言えば、滑空する動物なので体重が増えればどうなるかはわかりであろう。



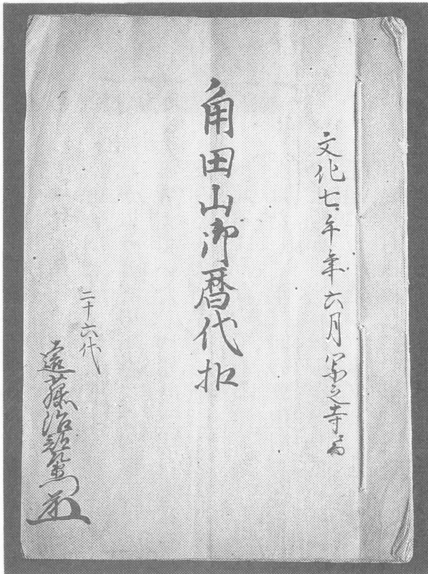
妙光寺史話

〈角田山御歴代控〉より（七）

四、長岡藩との関係まとめ

文化十年（一八一三）三十七世日妙代に記された「御幕取替願」に添付した書によると、次のようにまとめることができる。

|                            |   |
|----------------------------|---|
| <p>○初代 忠成様<br/>一六〇九年より</p> | <p>○妙光寺八幡宮に参詣、八幡宮に田三町歩寄付<br/>○住職が長岡へ登られた時<br/>・御家中に宿泊<br/>・住職の献上品：茶三斤五本入、扇子一箱<br/>・殿から住職へ：沙二卷、羽織を下された</p> |
| <p>○二代 忠成様<br/>一六五五年より</p> | <p>○妙光寺に参詣 ○殿妙光寺に宿泊<br/>○八幡宮へ畑一反七畝寄付<br/>○殿から住職へ：沙二卷、御紋付の法衣を下された<br/>寺へ：御幕を寄付</p>                         |
| <p>○三代 忠辰様<br/>一六七四年より</p> | <p>○妙光寺に参詣、新田三反寄付<br/>○殿から住職へ：沙二卷下された<br/>○御回領の時：八幡宮へ金三〇〇疋、尊牌へ金三〇〇疋下された</p>                               |



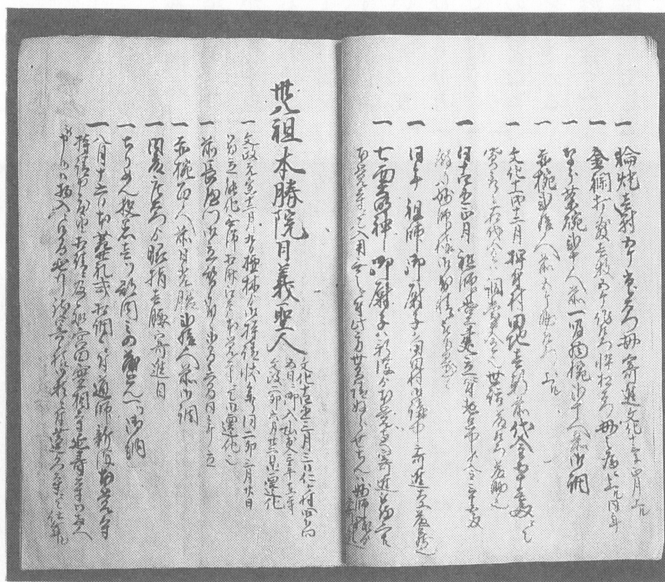
|                            |   |
|----------------------------|---|
| <p>○四代 忠寿様<br/>一七二一年より</p> | <p>○御回領の時：八幡宮へ金三〇〇疋、住職に金三〇〇疋下された</p>  |
| <p>○七代 忠利様<br/>一七四八年より</p> | <p>○寛延三年（一七五〇）九月二十七日、御参詣の予定が、急に変更し住職は巻で殿にお目見え<br/>○宝暦四年（一七五四）夏、住職は江戸にて殿にお目見え</p>                |
| <p>○九代 忠精様<br/>一七六六年より</p> | <p>○宝暦四年十一月、長岡にてお目見え、御紋付の法衣をいただく<br/>○天明七年（一七八七）三月七日、殿様参詣の時、住職が留守だったので、高山蓮久寺が出迎えた。三宝、八幡宮に参詣</p> |

(1) 六代藩主以前のことは、寺が焼失し、関係文書の大部分がなく  
なったことを考えると、残っていた資料や、関係者の伝承をも  
とにまとめたものと思われる。

(2) この記録は「妙光寺歴代控」の三年後の一八一三年に書かれた  
もので、遠藤治部右衛門氏宅にあった資料を参考にまとめたも  
のと考える。

(次号は御妙判について)

(石田誠太郎)



## フェスティバル安穩報告

第七回フェスティバル安穩が、八月二十四、五日の二日間開かれまして。今回は縁あって映画監督の新藤兼人氏を講師にお迎えしました。参加者が多すぎても困ると考え告知をひかえたのですが、それでも二百五十人程が本堂に集まり盛会でした。

前日の大雨もきれいにあがり、晩夏の青空のもと、蝉しぐれと爽やかな風が心地よい会場。新藤監督の「私の人生、私の死」と題した講演で始まりました。映画『午後の遺言状』の製作過程と、妻の乙羽信子さんが死を迎えるまでのお互いの心模様を淡々と語って下さいました。

休憩を挟んで、会場から檀家、会

員、一般の人六人が出て監督を囲み、車座になつての語り合いの場です。ひとりひとりの話しに、監督が感想や思いおこしたことを自由に語る。お母さんから夏目漱石、永井荷風まで時間を忘れて熱をおびてくる。話す方も自身の生い立ち、再婚、つれあいの死、友人の死、老いなど、まさにひとりひとりの「私の人生、私の死」でした。

監督の話しで会場が笑いの渦となつたり、参加者の話しに目頭をおさえる人がいたり、心が一つに溶け合った感じの、あつという間の二時間半でした。また監督は安穩廟に対して「東京で話しを聞き共感を覚えて、好奇心を持って来た。実際に見て、自然に溶け





込み、素朴で気楽な形がすごくいい。この存在と運動、やり方も現代的で、将来も安心できる。感動した」と会場で話されました。

日が西にかたむいた五時、十二人の太鼓、二十人の琴の演奏で安穩廟法要が開始。八人の僧の読経、講中の太鼓、稚児と参加者の献燈献花で五十分間の荘厳な法会でした。このとき時間の都合上、途中で退席されることになっていた監督でしたが、去り難く席を立ってはまだ座ってしまおうという光景に、周囲の人達が時間を心配してハラハラしながらも、嬉しく感じていました。

夜、葡萄酒の中のレストラン、「カーブドッチ」で九十人の懇親パーティー。宿泊は岩室温泉、語らいの輪は深夜まで。翌日、昨年アンケートをもとに安穩廟の現状とこれからの話し合い、昼食後解散。二日間の日程を終えました。

新藤監督の魅力と多くのスタッフの協力で、充実感のある集まりとなりました。

した。その後幾度かの反省会を開き、今後の運営も含めて検討を続けていきます。三基目の建設も準備が進行中で、会員も増加していますので、根本的なところからの見直しと点検を考えています。関連して、東京四ツ谷の東長寺、巢鴨のもやいの碑、それぞれの代表と情報交換も行ないました。

また、いつもスタッフとして協力の大分市妙瑞寺住職菊池さんが、安穩廟建設の準備を始めました。去る十月に呼びかけの集いを開いたところ、関心を持つ市民五十人が参加。福祉に力を入れる県の生協が協力を申し出るなど、盛り上がりが見られます。来年三月十五日にシンポジウムを計画していますが、これに樋口恵子さんの参加も決まりました。

妙光寺安穩廟は開設八年目となり、いよいよ会員の高齢化による日常生活の不安が、現実のものになりつつあります。なるべく金銭負担の少な

い助け合いの方法はないものかと、考えてはいますが……。関心を持つ人達の話し合いの場を持ちましょう、とのお声もあります。ご意見をお寄せ下さい。一方で今年、県外から転入された方



が二組おいででした。今のところ、妙光寺として生活上のお手伝いはお約束できない状況です。一組の方の経験を お寄せいただきましたので、情報として掲載いたします。

### 絵葉書を作りました

真つ赤なナデシコの花に囲まれた初夏の安穩廟と、木々の緑に囲まれた妙光寺（ラジコンヘリで空撮）の二種の絵葉書を作りました。

ご希望の方は、安穩廟か妙光寺それぞれ枚数を記入の上、一枚当たり五十円×枚数の郵便切手を同封してお送り下さい。（例、合計四枚なら五十円切手を四枚）送料不要。



# 安穩廟の近くに住みたい

新潟県三条市 三 箇 重 孝

再婚同士の私（六五歳）妻（五七歳）には、子供もなく、大阪生まれの私には郷里も無く、一人っ子の私の両親は、既に他界し、いずれも、大阪の四天王寺の納骨堂に眠っています。

常々、妻と一緒に眠れる“墓”をと考えていた折に、NHKテレビで安穩廟の事を知り、一昨年八月に安穩廟を契約した次第です。

当時は、仕事の関係で、三重県鈴鹿市に住んで居りましたが、安穩会員となった後は、「新潟県の、それも、安穩廟のある巻町に近い所を、終の住かにしたい」とのラブコールがつのって来ました。移住するとしても、夫婦二人だけの住宅を建築する資金

は、老後の為の現金を蓄える方を、選んだ私達には、年金額での、入居資格可能な公営住宅に入居する事が、賢明だと考えました。

新潟県は、安穩廟契約に訪れたばかりで、西も東も、皆目、未知の地でしたが、当時の勤務先では、有給休暇も、制度上あるばかりで、自己事由での休暇をとり難い職種でした。そこで、市販の道路・観光地図や、新潟県内の衛星都市の内、当地、三条市を含む四〇五の市役所に架電の上、都市要覧等、各市の、沿革・風土や産業等も、併せて、検討しました。その結果、当地の、三条市を選ぶ事としたのですが、そのほかに、各市の担当部署に架電した折の、そ

れぞれの応答には、微妙な「何か？」の違いがあるもので、三条市に電話した折の受話器を通じての、その「何か？」の他市との違いに、私を、引きつけるもあつたと思われまます。

定年退職後の今年二月十九日に、同市宅建業協会に手配の上、契約したアパートに転入々居し、まず、三条市民となりました。その上で、同市公営住宅に申込の為に、担当部署に訪庁した時の担当者は、電話での会話の折、私が、「何か？」を感じた通りの「市民サービスに徹した公吏」を絵に書いた様な市職員でした。その後、当初は、「一〇二年は、アパート暮らし」を覚悟していましたが、幸運にも、転入五ヶ月後の七月十日に、現在の約四五㎡の庭付一階3DKの市営住宅に、入居する事が出来ました。

これまでは、公団住宅等の二階以上の住居環境で暮らした事が多かったので、「小さくとも、土いじりの出来る庭付住宅」を希望していた私達でした

が、幸いにも、新築住宅ではないけれど、希望通りの公営住宅に入居できました。以来、妻は、趣味の花作りに精を出したり、周辺の山歩きでは、珍しい山野草を楽しめる、自然の真ん中で過ごせる事で、《前住地・鈴鹿市の内科医に、「ストレスによる、軽度の心臓疾患の疑いあり：」》と診断された事が、嘘の様な、血色も良くなり、元気な日々を過ごしている毎日です。

ただ、私達は、特に寒さに弱く、今年二月、十年振りの降雪量だった当地に転入して来たけれど、積雪地域で過ごした事がなく、「豪雪地域で寒冷地？」《太平洋側「東海地方」とは、平均寒暖差 マイナス三〜五度》と言われていましたが、前住地の鈴鹿山脈おろしの寒風に比べて、ほとんど無風状態の当地に来て、「雪の日は暖かい」と言われる事が、実感として解った次第です。

次に、落ち着くと共に『新潟日報

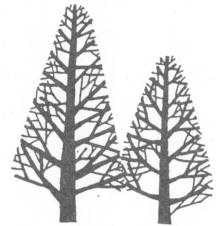
社刊Ⅱ①、「緑に親しむ」へ新潟県森林浴の森一〇〇選》②、新潟ぶらり日帰り立寄り湯』の二誌等を参考とした、ドライブ・森林浴・湯、等の楽しみや、近くの、五十嵐川の川辺を、「我が家の長男？」ダックスフンド・ミニチュア・ロングヘアーを連れての毎日の三〇〜五〇分の散歩等々：や、趣味の集い、いろんなグループを通じての交友の環等、「他所者！ という閉鎖的な事も無いものと信じて、こちらから溶け込んでみたいと思つて居ります。

末章乍ら、安穩廟（妙光寺）までは、自動車・JR利用で、いずれも一時間足らずです。早速、今年の、フェスティバル安穩に参加しましたし、その他、お寺の諸行事にも、手軽に参加できる事が、私達にとって、何よりのことです。





「疲れたときの処方箋」



流れ星ひとつ見つけた

あつ、と思った瞬間の出来事

それからずっと

空を見上げていたけれど

もう見ることはかなわなかった

見たくても見られないもの

頑張ったってかなわらない望み

きつと人生って

流れ星をみつけるようなもの

かも知れない。

運良く見つける流れ星のように

ありきたりの毎日の中に

あつ、と思えることを

見つけられたとき

くじけずに進んで行こうと思う

それはほんの小さな出来事

でもそんなちっぽけなことでも

勇気がわいてくる

むくむくと ひっそりと

毎日の暮らしにうんざりしたり、

嫌なことがあったとき、どうやって

元気をだしますか？

落ち込んでいる自分をどうやって

なくさめますか？

あなたに会うとわいてくる

この不思議な力

元気ですか

はい

はいっていうひとことに

いくつもの気持ちがかもっている

おわかりありませんか

はい

元気でまた会える

そうしてひとことふたこと

話をするだけ

たったこれだけのために

元気でいよう

美しい風景や、静かな場所、波の

音や花の香り、真暗やみの夜。にぎ

やかな町、昼寝、おいしいごちそう。

よいこらしよ、その時の気分で立

ち上がるきっかけはさまざま。

流れ星もほっと出来る友だちも、

心がつらいときには、すこくすこく

優しく感じられる。

人にも自分にも優しくなりたい。

(小川なぎさ)

# 行事案内

## お札配り

十二月に入り来年の「お札」を持つて、暮れのお経に各家を伺つていきます。近年は広範囲に檀家が増えて、住職と鎌田の二人でやっと回りきる状態ですが、今年は鎌田が荒行堂に入行中で住職一人。他の用もあり年内には回りきれません。その場合は年明け後に伺いますので、ご了承下さい。

## 十二月三十一日、除夜の鐘

大晦日夜十時半より本堂で除夜法要。十一時四十分頃から除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に一回ずつ撞き、記念品と抽選で楽しい縁起物の景品が用意されています。

暖かいコンニャクもですすし、境

内がライトアップされとても賑やかです。十一時半には並ばないと百八以内には入れませんので早めにおでかけ下さい。

この時本堂前でお焚き上げをしますので、古いお札、しめなわ等お持ち下さい。

## 元旦 年始受け

元旦の朝九時より午後三時頃まで年始受けをしています。一年の始まりは妙光寺本堂から、です。おでかけ下さい。平成九年に法事の当たっているお宅は、祖師堂に貼り出してありますので確認してください。

一年の家内安全、健康、幸運を祈願する『星祭り』は、一件二千円です。

# あ・と・が・き



七月のお盆から十月いっぱい、文字通りの東奔西走でした。ことにお彼岸後、日曜に法事を終えてから東京経由で寝台特急で雲市に行き、二日間講演三回、飛行機で戻り、すぐに御会式と先代の法事、続いて身延山参拝旅行、そのまま東京で会議、戻って大分市での会合に出席等々。

鎌田が不在になるので十一月は出張を極力減らして、と思っていたらこれまででの疲れが一举にでて十日程ダウン。寺で夜ごろごろしているのと、「なんだかお父さんがいて変だ」と娘たちに言われる始末。

そんなこんなで九月の号をまたまたサボってしまいました。今回は十二月早々に出せそうでホッとしています。慌ただしい年末年始、寒さに負けずくれぐれもお元氣にお過ごし下さい。

(小川)